特別寄稿

「城西大学と共に 51 年」

清　水　公　一

Abstract

This paper summarizes the background of the establishment of Josai University. Josai University was established in 1965 by Mr. Mikio Mizuta and Mr. Tomigoro Shindo.

As an exceptional student during my 3rd and 4th year, I had the honor to hold a speech during The first graduation ceremony in 1969. Mr. Mikio Mizuta wrote in "Josai University Publicity" that he was moved by it. The column inspired me and touched me deeply so I made a promise to make Josai University a good university.

1. は じ め に

城西大学に第 1 期生として入学し教員となり，51 年間城西にお世話になり今年（2017 年）定年を迎えた。この度，紀要委員会のご厚意により経験談を書く機会を与えて下さいましたので，感謝を込めて執筆させて頂いた。

2. 大学創立の真相

⑴　新藤富五郎先生の構想

1963 年，城西高校校長の新藤富五郎先生は，これからの日本を双肩に担って第一線で活躍するためには，大学教育を身に着けることが必要とし，また高等学校長という立場から大学への入試地獄を見るに見かねて，高校から大学への一環教育を実現しようと考えたようである。（穂刈 1978）

⑵　水田三喜男先生中心となる

新藤先生は短大を創りたいと，同郷の友人であり大蔵大臣をされた水田三喜男先生に話を持ち

掛けたが，水田先生はどうせ創るなら 4 年制の大学にしようと言った。大学設立は水田三喜男先生が中心になって推進したが，公務多端のため先頭に立って立案実行したのは新藤富五郎先生であった。（穂刈 1978）新藤先生は理科系大学創設を構想し，1963 年 3 月，永田義雄先生（後の城西大学教授，図書館長）を東京農大に訪ね，大学創設の協力を求めた。永田先生は 7 月の末，穂刈四三二先生（東京都立大学教授，後城西大学学長）を新藤先生に紹介した。創立者は 7 月には校地を埼玉県入間郡坂戸町多和目（現坂戸市けやき台）に購入することを決定した。（永田 1978）

⑶　設立準備委員会の発足

1963 年，永田，穂刈両名は大学経営等検討を重ねた結果，理学部と経済学部の 2 学部で出発することを新藤先生に進言し快諾された。経済学部長には明治大学総長であった佐々木吉郎先生，理学部長には大阪帝大教授，東京都立大学教授であった千谷利三先生が内定した。（穂刈 1978）1963 年 10 月に武市春男先生（大原簿記学校創立者理事長，都立商科短大学長）が加わり，設立準備委員の選定にとりかかり，1964 年 4 月 24 日，城西大学設立準備委員会が発足した。

水田三喜男先生の指示の下に委員会は城西高校校長室で，10 回以上の会合を開いた。一方，水田三喜男先生の意見で校舎の設計を久米建築事務所に，施工は大長崎建設と決まった。厖大な書類が若手準備委員の手で日夜作成されてゆき，9 月末ついに完了した。菅田清治郎先生（水田先生の友人で常務理事）と新藤宣夫先生（ご子息で後の附属高校校長）等数人が文部省に申請に行き，1965 年 1 月 25 日設置認可がおりた。（永田 1978）

3．1 期生の苦労

⑴　1 期生の入学と淋しいキャンパス

川角駅は小さなホームしか無く，大学へは神社の裏を通る芝道で，雨が降ると長靴でないと歩けない状況であった。キャンパスの中央には南北に広い道路があり，茫々と広がる赤土の間に理学部棟と経済学部棟がポツンと建っていた。1965 年 4 月 20 日，今の 2-102 教室で入学式が行われ，170 人の学生が入学した。はじめクラブ活動は無く，学生は授業だけ受けて帰るだけであった。しかも食堂も無く，皆川商店のお兄さんがパンを売りに来，皆それに群がった。買いそびれでもすれば午後の授業は地獄であった。

⑵　課外活動のはじまり

1 期生は直ちにクラブを創り，あっという間に体育会系 13，文化系 4 団体が生まれた。硬式野球部は尾崎剛毅先生を部長に鹿島洋一君が創り，英会話部は蒔田栄一先生を部長に私が創った。

私は貞末堯司先生を部長に考古学研究会を創って古墳や縄文遺跡を発掘をした。学生新聞を発行している城西大学新聞会にも入り，趣味を活かして「城西大学新聞」の題字のデザインや「カーツーン」という風刺漫画を連載し，客観的に見る目を養うことが出来た。

⑶ 授業事始め

授業は 1 年の時，英語 2 コマ，ドイツ語 2 コマ，まだ専門の先生の授業が少なかったため 1 年に外書講読が置かれていたので履修した。学生は私一人であった。（3 年の外書講読は渡辺好章先生で，この授業も一人であった。）週 5 コマの外国語は後の大学院進学のために役立った。1 期生は学生生活の手本が無く，教授の学生時代の話が全てあり旧制高校生のように振舞った。安房高，前橋高，川越高卒の友人もいたので，放課後マルクスの資本論の訓詁学的講読会をしてもらったり，コンパでは一高や三高などの寮歌を歌ったりした。建学の精神にもあるが，都塵を離れていたので確かに知識，生き方，多くのものが吸収できた。

⑷ 留守居役の第 2 代理事長と副学長

水田三喜男先生は 1966 年 12 月，佐藤内閣の大蔵大臣に就任したので，その間，第 2 代理事長として小池音一氏（水田三喜男先生が会社を興したとき片腕となった人で，東京カーテンオール工業株式会社社長）が務め，実際の学長の仕事は新藤副学長が務めておられた。新設大学なので 3 年生と 4 年生の時に私，特待生になってしまったが，賞状はいずれも「副学長新藤富五郎」の名前であった。この時「鶏口牛後」の人生を生きようと思った。ある時新藤先生に坂戸の料亭，大島屋に連れて行ってもらったことがあり，その時，斎藤秀三郎仕込みの英語で落語を学生に聴かせたいと言っておられたが，それが叶わなかったのは残念である。

4. 卒業式と同窓会設立

⑴ 立ち位置の原点

水田三喜男先生が大学に戻って来られて間もない 1969 年 3 月 29 日に第 1 回卒業式が今の 2-101 大教室で行われた。私が卒業生代表答辞の中で，苦労話の後に続けて「これから来るでありましょうどの卒業生にも増して母校に対する愛着の念が強く，お名残り惜しく存じます」（城西大学新聞 1969）と読ませて頂いたところ，水田三喜男先生は大学広報第 1 号の「ひとこと」欄に，「第 1 回卒業式のときに，卒業生代表が答辞の中で，お名残り惜しうございます，といった言葉を私はどうしても忘れることができない。それは創立期の不便と苦労を共にした学生たちの心情をのべたものであったからである。ドロンコの道を長靴でかよい，レンゲの種も生えない赤

土の上に運動場を次々に自分の手で整備したことから芽生えた愛着の言葉であった。それだけに，理事者として，当時の学生に対して，済まない気持ちが一杯である。いつの日か全員を学園に招じて慰労したい，このことばかりを思っている。」（城西大学広報 1975）と書かれていた。これを拝読して私は奮起し，城西大学を一人前の大学にするために自分に出来ることで頑張ると誓った。新任教員の若き安部磯雄に大隈重信が「先生は……」と言ったのに奮起して学問に早稲田野球のために頑張ったという早稲田大学の歴史に肖りたいと思った。（早稲田百人 1979）これが私の城西での立ち位置の原点である。

⑵　評議員会と同窓会

卒業すると学校法人城西大学評議員にさせて頂き，永田町で評議員会が開かれ，赤坂の料亭で懇親会が行われた。水田三喜男先生が私の目の前で総理大臣と思われる人に電話で丁寧に報告をしておられた，その時の大きな背中は今でも忘れない。

また，1 期生，2 期生，3 期生が城西高校に集まり，同窓会設立の準備をした。私は規約の原案作りをした。そのようなわけで第 2 代会長には助手に就任したばかりの私が選出された。ここでも改革癖が出て，会報「けやき」第 1 号を発行したりホームカミングデーを開催したりした。

5. 研究活動のはじまりと被引用論文数

ここからは謙虚さのタガが外れた年寄りの自慢話としてお聞き頂きたい。「マーケティング・ミックス」といえば 4P 理論が一般的であるが，改革癖が講じて早稲田大学大学院商学研究科の修士論文のイントロに 4C 理論を載せ，1979 年「共生マーケティング」と「7 Cs Compass Model」を提唱して学会発表や論文も書くことになった。このモデルを載せた拙著『広告の理論と戦略』（創成社）が学会賞を頂くことになった。いま上記キーワードを検索すると英独仏西露中韓，アラビア語をはじめ 10 か国語以上で視られる。拙著が北京大学で，台湾，韓国で訳出出版されたこともあって英文，露文，和文等による被引用論文数が増えていった。

6. エンジン全開の 4-50 代

⑴　JEAP，シラバス，授業アンケート，WSP

44 才の時，1990 年から 91 年にかけて UCR の JEAP 初代レジデントディレクターを務めさせて頂いた。帰国し，JEAP 実施委員長（1991）や就職部長（1993, 47 才），学生部長を仰せつかった。7 月 27 日，シラバスの原案作成をし，11 月 19 日に授業アンケート調査票の原案を作成させ

て頂いた。大教室のマルチメディア装置の設置と補助学生の確保を中村静夫事務局長に願い出，学生アルバイトは認められなかったため苦肉の策で WSP をつくり，200 万円の予算を取り，WSP 準備室を確保させてもらった。WSP 奨学生は各ゼミの HP を作る等優秀であり，今も付き合っている。

⑵ カリキュラム改正と人事

1971 年に経営学科が出来，1997 年（51 才）から 4 年間，経営学科主任を務めさせて頂いた。3,000 名の学生を抱えた仕事の内容は学部並であった。平成 13 年度カリキュラムの大改革をし，1997 年 4 月蛭川幹夫先生と窪川静江先生を，1999 年 4 月福島和伸先生を迎え，草野素雄先生の教授昇格にも直接立ち会わせて頂いた。9 月，本学最初のビジネスインターンシップの導入にも関わったが，これらは前任者の下野武司先生の尽力によるものである。2001 年に学科主任を選挙によって草野先生に繋げることが出来た。これは経営学科最後の奇跡であった。やがて経営学部となったが，箱根駅伝もあり，実は楽しい日々であった。おわりにいつもあたたかく接して下さった学部の皆様全員に感謝申し上げたい。

参考文献

「城西大学（1965）パンフレット」
「城西大学広報」（1975）第 1 号，6 月 30 日
「城西大学新聞」（1969）第 7 号，3 月 28 日
永田義雄（1978）「同志的結合を求めて ── 新藤先生の心 ──」城西学園創立 60 周年記念事業実行委員会『道程：新藤富五郎先生の足跡』城西学園，449-452 ページ。
穂刈四三二（1978）「城西大学のことども ── 新藤富五郎先生と大学 ──」城西学園創立 60 周年記念事業実行委員会『道程：新藤富五郎先生の足跡』城西学園，438-444 ページ。
「早稲田百人」（1979）『別冊太陽』，11 月，51-52 ページ。